

河田山遺跡群 上八里遺跡群

－ 小松市東部産業振興団地造成事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ －

2022

石川県 小松市

(小松市埋蔵文化財センター)



東部産業振興団地造成前の丘陵全景（南上空から）



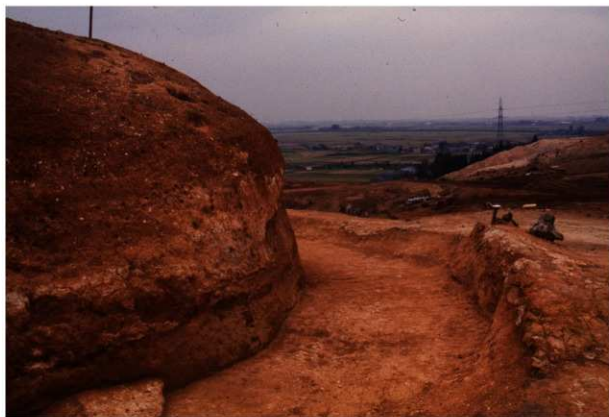
東部産業振興団地造成前の丘陵地全景（北上空から）



河田山弥生遺跡（B-3区）全景（北西上空から）



河田山弥生遺跡の環濠（北西上空から）



河田山弥生遺跡 環濠 1 近景（東から平野を望む）



河田山弥生遺跡 環濠 2 近景（北から）



河田山1号火葬墓検出状況



河田山1号火葬墓 骨蔵器



河田山 2 号火葬墓検出状況



河田山 2 号火葬墓 骨蔵器



河田山火葬墓 関連遺物集合

例 言

- 1 本書は河田山遺跡群・上八里遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 小松市が実施した東部産業振興団地（現、国府台）造成事業に伴う発掘調査報告書Ⅱとして、既に報告済みの河田山古墳群を除く調査結果を所収した。ただし、既に概要が一部報告されている上八里中世横穴群については、未確認資料が多く存在していたことから別の機会に本報告するものとして、今回報告からは除外している。
- 3 遺跡の所在地は、小松市国府台 1～5 丁目地内で、旧地籍は、河田山遺跡群が河田町ヤ・タ・レの部、上八里遺跡群が上八里町休場、中山、チ・トの部である。
- 4 発掘調査は、第 1 期工区の河田山遺跡群が昭和 61 年 7 月 1 日から昭和 62 年 9 月 19 日まで、第 2 期工区の上八里遺跡群が昭和 63 年 5 月 9 日から同年 8 月 31 日まで、小松市教育委員会が調査主体となって実施した。
- 5 発掘調査当時の体制および担当者、調査員・補助員に関しては、既刊報告 1『河田山古墳群』第 2 章第 2 節「調査の経過」に記載している。
- 6 出土品整理は、発掘調査終了後から平成 4 年（1992）の小松市立河田山古墳群史跡資料館建設までの間、展示対象品を中心に埋蔵文化財調査室で断続的に行われた。

平成 4 年以前 出土品整理・遺物実測・図面整理事業従事者は以下の通りである。

打田外喜代、宮田佐和子、江野直子、上野昌子、成毛覚美、山口美子、伊藤節子、金森和美

本報告書作成にかかる整理事業は、小松市埋蔵文化財センターにおいて、平成 25 年（2013）度から「まいぶん魅力アップ推進費」として、平成 30 年（2018）度からは「加賀国府歴史再発見費」として実施した。

小松市埋蔵文化財センターにおける出土品整理の主な作業従事者は以下の通りである。

調査図面整理・照合、遺物実測：山崎直子

遺物接合・分類・復元、遺物実測：国本久美子・谷本美紀

遺構・遺物トレースほか：和泉如子・杉直子

石器実測・トレース：樫田誠（石材鑑定：作本達也）

遺物写真撮影：樫田誠・橋本正博

- 7 本書の編集は主に樫田誠が行い、図版作成等に下濱貴子・横幕真が協力した。
- 8 本書の執筆は、樫田誠、望月精司、下濱貴子、宮田 明が分担して執筆し、樫田以外の担当は目次に記した。
- 9 本書で示す方位は真北で、水平基準は海拔高（m）、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系（日本測地系）に準拠している。
- 10 調査に関する記録と出土品は、小松市埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 発掘調査から河田山古墳群史跡資料館の展示および史跡整備、そして出土品整理・報告書作成にいたるまで、以下の方々・機関・団体からご協力・ご指導を賜りました。発掘調査に関しては調査が古く記録が断片的となっています。記載の遺漏等についてお詫言するとともに、関わっていただいた皆様に感謝申し上げます。故人となられた方もいらっしゃると思いますが、当時の記録からそのまま掲載させていただきます。また、機関・団体名も、発掘当時の名称で記載しています。（敬称略・50 音順）
秋山進午、伊藤雅文、石黒立人、猪俣兼勝、上野与一、宇野隆夫、大川 清、大塚初重、垣内光次郎、加納他家男、唐川明史、河原純之、川畑 誠、河村好光、北垣聡一郎、北野勝次、北野博司、小岩直人、小嶋芳孝、桜井基一、沢田正昭、白石太一郎、菅原雄一、諏訪順順、高 酋外、高堀勝喜、田嶋明人、田邊朋宏、近間 強、富田和気夫、中屋克彦、西野秀和、橋本澄夫、浜岡賢太郎、林 勝則、林 大智、平川 南、平口哲夫、広岡公夫、藤井明夫、前田清彦、三浦純夫、三浦俊明、三宅敦気、森 浩一、安 英樹、安中哲徳、谷内尾晋司、山前圭佑、山本孝文、湯尻修平、吉岡康暢、和田晴吾
石川県立埋蔵文化財センター、石川考古学会、金沢大学考古学会、（社）小松市シルバー人材センター、セントラル航業株式会社、奈良国立文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所

目 次

第Ⅰ章 遺跡の環境および調査の経緯と経過	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	4
第3節 調査に至る経緯と調査経過	10
第Ⅱ章 河田山遺跡群	13
第1節 旧石器時代	13
第2節 縄文時代	15
1. 遺物分布の概要	15
2. 縄文土器	(宮田 明) 16
3. 縄文時代の石器	18
第3節 弥生時代(河田山弥生遺跡)	23
1. 検出された遺構	23
2. 出土土器	(下濱貴子) 37
第4節 奈良時代	45
第1項 河田山火葬墓群および関連遺構・遺物	45
第2項 河田山1号窯	(望月精司) 55
1. 遺跡の概要と調査方法	55
2. 検出された遺構	58
3. 出土した遺物	61
図版(旧石器・縄文時代)	77
(河田山弥生遺跡)	79
(河田山火葬墓群)	89
(河田山1号窯跡)	93
第Ⅲ章 上八里遺跡群	(望月精司) 97
第1節 上八里横穴墓群	97
1. 遺跡の概要と調査方法	97
2. 検出された遺構と遺物	98
第2節 上八里1号窯	104
1. 遺跡の概要と調査方法	104
2. 検出された遺構	106
3. 出土した遺物	110
図版(上八里横穴墓群)	135
(上八里1号窯跡)	137

挿図目次

第1図	小松市の位置	1	第41図	12号墳下方の帯状テラス遺物出土状況図	53
第2図	小松市周辺の地質	2	第42図	終末期古墳と火葬墓関連遺物の分布	54
第3図	小松市周辺の地形	2	第43図	河田山33号墳の根根からの関連遺物	54
第4図	開発地周辺の地形	3	第44図	能美宮跡群の分布	55
第5図	河田山古墳群周辺の遺跡	7	第45図	河田山古墳群と河田山1号宮跡の位置	56
第6図	東部産業振興団地造成計画と工事着手前の 周辺遺跡	9	第46図	1号宮跡 室内平面と縦断面図 (S=1/60)	59
第7図	東部産業振興団地造成地内の旧町界と判明 した遺跡	10	第47図	1号宮跡 室内断面図と横断面図 (S=1/60)	60
第8図	上八里中世横穴全体図	11	第48図	1号宮跡出土遺物 1 (S=1/3)	63
第9図	旧石器時代の石器	13	第49図	1号宮跡出土遺物 2 (S=1/3)	64
第10図	八里向山遺跡の旧石器時代遺物	14	第50図	1号宮跡出土遺物 3 (S=1/3)	65
第11図	縄文時代の遺物分布	15	第51図	1号宮跡出土遺物 4 (S=1/3)	67
第12図	河田山遺跡群出土縄文土器	17	第52図	1号宮跡出土遺物 5 (S=1/3)	68
第13図	縄文時代の石器 (1)	19	第53図	1号宮跡出土遺物 6 (S=1/3)	69
第14図	縄文時代の石器 (2)	20	第54図	1号宮跡出土遺物 7 (S=1/3)	70
第15図	縄文時代の石器 (3)	21	第55図	1号宮跡出土遺物 8 (S=1/3)	71
第16図	河田山弥生遺跡の根根 (1支群尾根)	23	第56図	1号宮跡出土遺物 9 (S=1/3)	72
第17図	B-3区遺構配置全体図	25	第57図	南加賀宮跡群須恵器編年Ⅱ 3期細分案	74
第18図	環濠土層断面図 (1)	27	第58図	須恵器法量分布図	74
第19図	環濠土層断面図 (2)	29	第59図	上八里横穴墓群の位置と周辺の横穴分布 (S=1/5,000)	97
第20図	1号住居跡 床面ピット土層断面図	31	第60図	調査区全体図 (S=1/150)	98
第21図	1号住居跡 平面図・土層断面図	32	第61図	1号横穴墓平面・断面図 (S=1/40)	100
第22図	1号住居跡遺物出土状況図	33	第62図	1号横穴墓土層断面図 (S=1/40)	101
第23図	2号住居跡平面図・土層断面図・遺物出土 状況図	34	第63図	1号横穴墓出土遺物 (S=1/3)	102
第24図	3号住居跡平面図・土層断面図・遺物出土 状況図	35	第64図	2号横穴墓平面・断面図 (S=1/40)	103
第25図	10-3号土坑平面図・遺物出土状況図	36	第65図	上八里 1号宮跡の位置図 (S=1/10,000)	104
第26図	B-3溝 1 平面図・土層断面図	36	第66図	調査区平面図	105
第27図	B-3区出土土器 1 (S=1/4)	39	第67図	1号宮平面・断面図 (S=1/40)	107
第28図	B-3区出土土器 2 (S=1/4)	40	第68図	1号宮跡室内土層断面図 (S=1/40)	108
第29図	B-2区出土土器 (S=1/4)	41	第69図	1号宮跡灰原断面図 (S=1/60)	109
第30図	河田山南尾根全体図	45	第70図	1号宮跡出土遺物 1 (S=1/3)	114
第31図	B-2区 奈良時代遺構分布図	46	第71図	1号宮跡出土遺物 2 (S=1/3)	115
第32図	1号火葬墓 平面図・断面図	47	第72図	1号宮跡出土遺物 3 (S=1/3)	116
第33図	1号蔵骨器	48	第73図	1号宮跡出土遺物 4 (S=1/3)	117
第34図	1号火葬墓周辺出土須恵器 (S=1/3)	48	第74図	1号宮跡出土遺物 5 (S=1/3)	118
第35図	2号火葬墓 平面図・断面図	48	第75図	1号宮跡出土遺物 6 (S=1/3)	119
第36図	2号骨蔵器	49	第76図	1号宮跡出土遺物 7 (S=1/3)	120
第37図	近隣出土須恵器	49	第77図	1号宮跡出土遺物 8 (S=1/3)	121
第38図	溝 SDO2・土坑 SKO2 平面図・断面図	50	第78図	1号宮跡出土遺物 9 (S=1/3)	122
第39図	土坑 SKO5、SKO6、SKO7 平面図・断面図	51	第79図	1号宮跡出土遺物 10 (S=1/3)	123
第40図	B-2区 帯状テラス (道路状遺構) 土層断面図	52	第80図	1号宮跡出土遺物 11 (S=1/3)	124
			第81図	1号宮跡出土遺物 12 (S=1/3)	125
			第82図	1号宮跡出土遺物 13 (S=1/3)	126
			第83図	上八里 1号宮跡出土須恵器食膳具法量分布図	128

第Ⅰ章 遺跡の環境および調査の経緯と経過

第1節 地理的環境

1. 小松市の地形と地質概要

南北に長い石川県は、令制国にほぼ準じることから、北半の能登と南半の加賀に地域区分されており、さらに加賀地域は、県下最大河川の手取川を境として、主に平野部を北加賀と南加賀に地域区分している。小松市は南加賀地域の中央に位置して最も大きな面積を占有している。南北に長い市域は、北西縁で日本海に面し、北は能美市、南西は加賀市、東は白山市の山間部、そして南端は標高1,368 mの大日山を境に福井県勝山市と接している。市域の平野部を中心とした地形・地質については、新修小松市史資料編 17 考古の編纂にあわせて詳細な調査が実施され、その成果が市史に掲載されている（小松市 2020）。以下、この成果に基づいて記載する。

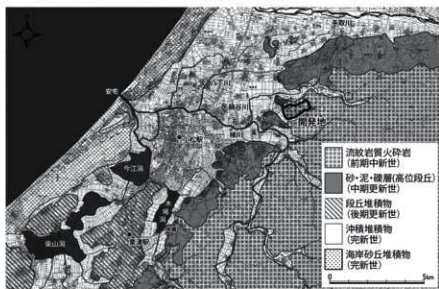
小松市の地形は、市域南東部の大半を山地（両白山地）が占めている。日本海に面する北西縁に海岸砂丘（沿岸州）が発達し、その東側の低地部北半は、手取川扇状地の南縁と接して、梯川とその支流の氾濫原で自然堤防が散在する沖積平野となっている（能美低地）。一方、南半は、三つの潟湖とその埋積平野、それに囲まれた台地（月津台地）地形からなる。木場潟・今江潟・柴山潟の三つの潟湖は、かつて「加賀三湖」と呼ばれ、昭和前半期まで風光明媚な水郷風景をとどめていた。現在は、今江潟のすべてと柴山潟の3分の2が干拓され、木場潟のみが原形をとどめている。いずれも縄文海進の最高頂期には海の入江だったもので、沿岸州によって段階的に海と仕切られて形成されたことから、海岸線とほぼ平行する形態となっている。月津台地から北に延伸して市街地の基盤となっているのが能美丘陵である。能美丘陵が平野部と接する前縁部には、低平な海成段丘地形が断続的に残されており（八幡台地）、丘陵と山地の境界を含めて、地形配列が基本的に海岸線と平行な北東-南西方向をなしていることがわかる。こうした地形配列により、低地部の潟湖から望む山並みは、白山を背景として、順次高さを減じながらたなびく緑の景観として美しい。

地質的には、福井県との境となる最高所の大日山付近に一部中生代ジュラ紀の地質が分布するが、山地・丘陵の大半が新生代第三紀中新世のいわゆるグリーンタフ変動に伴う火砕岩類に覆われている。良質の角礫凝灰岩などは里山近くでも各所で断続的に露出し、古墳時代の切石積石室を最古に、近世・近代にかけて建築用石材として多用され、現在でも一部で切り出しが行われている。また、ガラス質の流紋岩などは石器石材として旧石器時代から利用され、熟水変質したものは九谷焼原料の陶

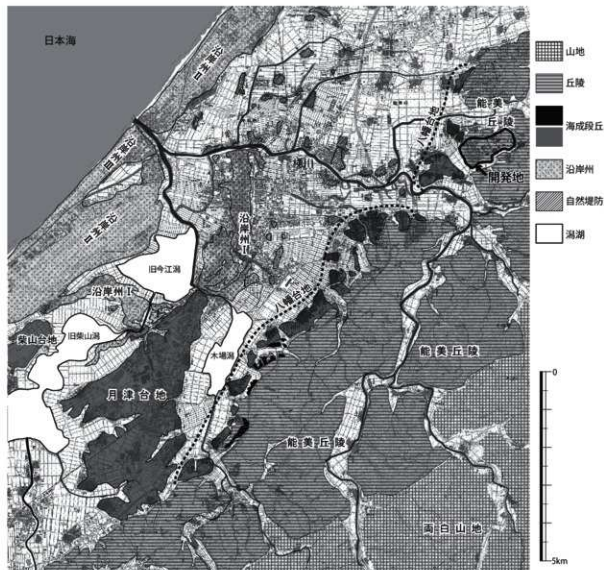


第1図 小松市の位置

石となる。さらに銅鉾床や弥生時代に利用された碧玉など、地質構造は小松のものづくりと関わりの深い多くの恵みをもたらした。能美丘陵縁部は高位段丘堆積物の分布域であるが、火砕岩類の岩盤起伏や断層も複雑にからみ、段丘面の平坦部がほぼ消失して起伏の激しい丘陵地形となっている。一方、月津台地及び能美丘陵前縁の海成段丘台地上の一部では、更新世後期の堆積物が比較的稳定して覆っている。



第2図 小松市周辺の地質

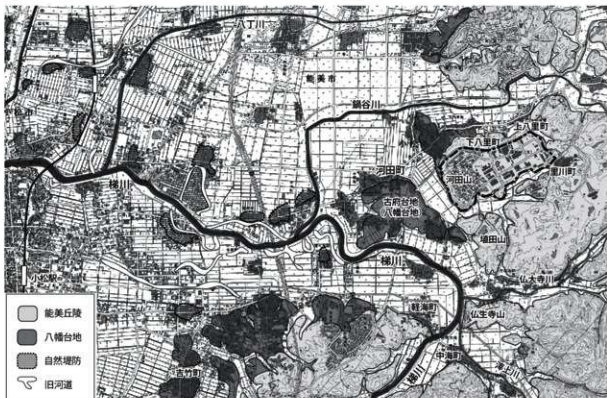


第3図 小松市周辺の地形

2. 遺跡群の位置と地理的環境

河田山遺跡群は、古墳群の範囲と同じ国府台2丁目・3丁目、上八里遺跡群は、国府台工業団地として全体が国府台5丁目となっている。発掘調査前の東部産業振興団地造成計画当時の所在地でいえば、前者が河田町ヤ・タ・レの部で、後者の大半が上八里町休場・中山という地籍、一部上八里町ト・チの部となっている。両遺跡群の間には、遺跡の確認されなかった下八里町1号～3号地籍がはさまれている。丘陵地内の地籍割と個別の遺跡分布等については次節で示すこととし、ここでは梯川流域における当該丘陵地の立地を俯瞰する。

鈴ヶ岳付近に源を発した梯川は、急峻な山地から丘陵部を縫って北へと流下し、軽海・中海付近で丘陵部を脱してから、流れをほぼ90度西へ転じ、緩流河川として蛇行しながら沖積平野を形成している。屈曲部の喉首を抑える丘陵は、梯川左岸の丘陵、梯川右岸で湊上川との間の丘陵、湊上川と仏大寺川間の丘陵（通称仏生寺山）、仏大寺川と鍋谷川間の丘陵といった四つの丘陵単位に区分される。仏大寺川と鍋谷川にはさまれた丘陵は、さらにその中央で里川町から南西へ下る小さな谷底平野で南北に区切られ、南半が通称埴田山、北半部が河田山となる。その谷底平野は北西へ90度屈曲して河田山の前面を縁取り、鍋谷川の平野部へと広く開口する。この谷底平野をはさんだ河田山の正面には、標高10～16mほどの低平な「古府台地」が横たわっている。梯川の流れを西へと向かわせた障壁の役割を果たしており、梯川に面する一部は、浸食による急崖地形となっている。従って、この台地背後の沖積地は、梯川の氾濫からは守られている。古府台地は海成段丘と考えられており、地形区分上は前項記載の八幡台地に属し、同様の段丘は河田山の裾から北へと舌状に延びる台地としても確認できる。河田山の西方、梯川右岸域の沖積低地では、梯川の支流鍋谷川及び八丁川が、西から南へと屈折するかたちで流下して連結し、流域には、自然堤防が散在して分布する。水田面の標高は、河田山前面の谷底平野で5～6m、鍋谷川周辺で4m前後、八丁川周辺で2.5m前後である。



第4図 開発地周辺の地形

第2節 歴史的環境

1. 小松市の遺跡概要

小松市域の大半が山地で占められているとはいえ、人間活動の主な舞台である平野部にかけては、丘陵から台地、潟湖や砂丘など変化に富んだ地形で構成されている。そうした多様な地形に応じて、時代ごとに多種多様な遺跡の展開がみられる。また、通史的に俯瞰すると、地質構造がもたらす地下資源の恩恵を時代のニーズに応じて活用した「石文化」や、加賀三湖を含む梯川水系の水運やその景観を活用してきた「水郷文化」も小松の風土をかたちづかった重要な要素である。

小松市域の北半は梯川流域の沖積平野を穀倉地帯とした歴史の舞台となる。後に加賀国府が置かれる地であり、弥生時代から中世にまで至る集落が自然堤防などの微高地上や低平な台地上に展開し、居館や官衙施設なども断続的に営まれている。そしてその低地部を取り巻く丘陵地には、穀倉地帯で台頭した首長たちの古墳、古代には国府や白山信仰との関わりのある山林寺院が展開する。

加賀三湖と月津台地、丘陵地で構成される南半部では、三湖の入り江を活用した縄文集落が月津台地に展開する。弥生時代から古墳時代にかけての集落は低調であるが、古墳時代後期になって突如、台地に古墳群がひろがり、飛鳥時代からは渡来系移民を中心とした集落域に転じ、古代・中世を通じて集落が営まれる。それに呼応して木場潟対岸の丘陵地では製陶遺跡群と製鉄遺跡群が展開する。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

旧石器時代

能美市の手取川に面した能美丘陵では、比較的安定した段丘地形が維持され、灯台竈遺跡群をはじめとする旧石器時代遺跡が展開している。しかし小松市域では、地質概要でも述べたとおり、高位段丘面相当となる能美丘陵の広い範囲が起伏のある新第三紀地層分布域で、浸食も激しく平坦面が失われた痩せ尾根地形が優勢となっている。能美市域に隣接する八里向山遺跡でかろうじて旧石器時代の遺物集中区を検出しているが、安定した出土状態に無く、河田山古墳群では流土中からの発見である。ただ、乏しい資料とはいえ、八里向山遺跡群では、茂呂系ナイフ形石器と有樋尖頭器、そして瀬戸内系ナイフ形石器を検出し、また、河田山古墳群でも瀬戸内系の翼状剥片を確認している。

縄文時代

八里向山遺跡群では、早期の押型文土器を最古に、晩期まで断続的に滞在したキャンプサイトが発見されている。河田山など周辺丘陵部でも同時代遺物は散見するが、能美市のように安定した平坦面が無く、旧石器時代同様に縄文集落の丘陵地での大きな集落はみられない。一方、台地に立地する小野遺跡や南野台遺跡、河田館遺跡などでは、中期から後期にかけての遺物が採取されており、集落として検出される可能性が高い。梯川流域低地は、縄文海進最高頂期には大部分が海域となったと考えられ、中海遺跡や赤穂谷遺跡、翡翠の垂飾りが出土した軽海西芳寺遺跡などの集落遺跡は、丘陵の裾部や山間の河岸段丘上の立地である。ただ、この低地部は5,300年前にはすでに陸域となっており、長野A遺跡で中期前葉の土器も発見されている。後期から晩期にかけては、北加賀の手取扇状地扇端部近くで集住する傾向にあり、南加賀では乏しい。大長野A遺跡や八日市地方遺跡では、後期から晩期の遺物も定量出土しており、低地で次代を担う小規模な活動が始まっていたようである。

弥生時代

梯川流域遺跡群展開の嚆矢となるのが弥生時代中期の拠点集落八日市地方遺跡である。遺跡内を流れていた河川の最下底からは遠賀川式土器が出土しており、潟湖と河川がつながる選地の萌芽は弥生前期にまで遡るようである。その後、中期初頭に本格的な環壕集落が成立する。稲作文化を支える木製諸道具が網羅的に生産され、また、市南部で産出する碧玉を原料に碧玉生産が大規模に行われた。集落最盛期には、東西文化の結節点の役割を果たした。中期後葉の四線文土器波及段階になると、集落は急速に縮小・解体へと向う。同時に小規模な集落が梯川の氾濫原へと分散したようである。

弥生時代後期前半になると、木器生産が盛んに行われた白江梯川遺跡や、北陸でも最古級の鉄鍛冶と銅鑄の鋳造関連資料が発見された一針B遺跡など、ものづくりの中心的な役割を担った集落が登場する。後期後半には、梯川左岸地の漆町遺跡群や八丁川に沿う松梨遺跡や高堂遺跡、鍋谷川に沿う千代オオキダ遺跡など、本・支流に集落が拡散・急増し、県内屈指の遺跡密集地となっていく。低地だけでなく、八幡台地の小野遺跡や八幡遺跡、吉竹遺跡など、台地上でも遺跡が展開しはじめる。

また、後期後半の一時期、低地との比高が20mを越えるような丘陵地で短期集落が認められるようになる。いわゆる高地性集落と呼ばれているが、集落がすべて高所に移動するわけではなく、低地の遺跡が並存している。本古墳群と重なる河田山遺跡は、防御機能を備えた集落と考えられるが、一方、大型住居や倉庫群を伴いながら、複数集落で構成される八里向山遺跡群は、丘陵上にも拠点的な役割を担う集落が存在したことを示している。

古墳時代

能美地域の古墳群は、古墳総数が二〇〇基を越えるとされ、わけても能美市の和田山・末寺山・秋常山・西山など独立小丘上の能美古墳群は、北陸最大級の前方後円墳を擁して中核を成している。

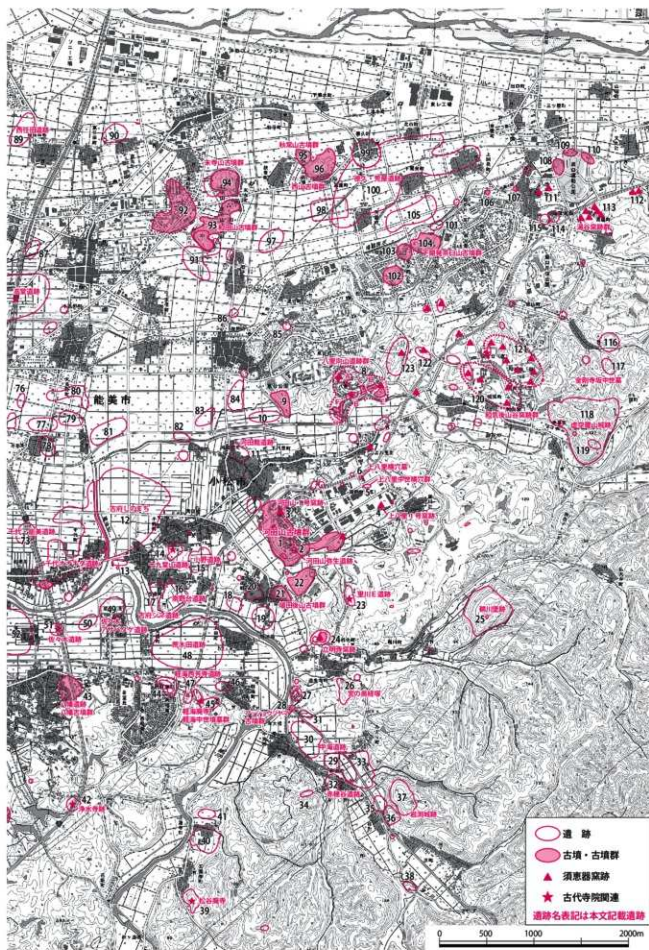
小松市域での前期古墳は、河田山古墳群と八里向山遺跡群、やや離れて千木野古墳群がある。ただ、失われた古墳も数多いと考えられ、特に、漆町遺跡群など梯川左岸の集落群を望む輕海から八幡にかけての丘陵や台地は、非常に残念な空白エリアである。古墳築造は主に丘陵上となるが、千代オオキダ遺跡において前期古墳の存在を確認しており、立地の違いを検討する必要がある。

中期の能美地域は、北陸有数の甲冑集中地域で知られる。埴田後山古墳群や八里向山F古墳群、下開発茶臼山古墳群など、中・小規模の円墳を主体とする古墳群で出土し、倭王権との軍事的関係を契機とした新興勢力の台頭が想定される。こうした新興勢力の古墳群では、後期の横穴式木室墳から終末期の切石積石室墳へと継起する状況を想定しており、埴田後山古墳群や八幡古墳群のほか、ブッシュウジマ古墳群も該当する可能性がある。

集落遺跡は弥生時代以来の傾向が継続し、梯川両岸から支流鍋谷川の合流地点を中心とする集落群と八丁川流域の集落群が展開する。また、八幡台地に立地する小野遺跡や八幡遺跡、吉竹遺跡などでも、弥生から古墳時代へと継続する。一見、広大に見える能美低地の集落遺跡は、総じて弥生から古代までの複合遺跡が多く、時代ごとの粗密が内在する。古墳時代の遺構で言えば、前期から中期へと縮小傾向にあり、後期には急速に衰退に向かっている。古墳群と集落との対応関係では、梯川右岸域遺跡群が河田山古墳群に対応すると考えたいが、首長居館とされる千代・能美遺跡が能美市の末寺山古墳群と結びつく可能性が示されており、古墳群も集落も重層的であった可能性がある。ただ、古府しのまち遺跡や千代オオキダ遺跡、漆町遺跡など梯川中流域集落群は、河田山や埴田、八幡などの取り巻く東部丘陵地の古墳群に対応し、一方、松梨、中ノ江、高堂、中ノ庄、西任田など八丁川流域の集落群は、能美古墳群に向かって展開しているようにも見える。現在の手取川の流路付近に、能美古墳群の造営主体となるような中核的集落が存在した可能性も考えておきたい。

№	道跡名・種別等	時代
1	河田山古墳群	古墳・飛鳥
2	河田山古墳跡	弥生
3	河田山1号墓	奈良
4	上八重1号墓	奈良
5	上八重中世横穴群	中世
6	上八重横穴墓	古墳
7	上八重2号墓	奈良
8	八重山山A道跡(集落)	弥生
9	八重山山B道跡(数寄・寺院)	旧・弥・平
10	八重山山C道跡(集落・古墳)	旧・弥・古・古
11	八重山山D道跡(集落・古墳)	旧・弥・古・古
12	八重山山E道跡(集落・古墳)	旧・弥・古
13	八重山山F道跡(古墳・墓)	古墳・中世
14	八重山山G道跡(清水地)	弥生・中世
15	八重山山H道跡(中世墓)	中世
16	八重山山I道跡(集落)	奈良
17	八重山山J道跡(集落)	飛鳥
18	河田山山古墳群	古墳
19	河田山下道跡	縄文・平安
20	河田道跡	縄・古・中世
21	古河のまら道跡	古墳・平安
22	古河道跡・古河アフリカ道跡	平安・鎌倉
23	十九堂山道跡・中世墓	平安・中世
24	小野道跡・スギノキ道跡	平安・中世
25	南野古道跡	縄文・中世
26	古河シヤ道跡	平安・中世
27	植田ウラム道跡	平安・中世
28	植田道跡	古代・中世
29	宮寺寺屋敷道跡	縄・古・中世
30	植田フルカ道跡	古墳
31	植田山古墳群	古墳
32	植田山古墳跡	古墳
33	里川6-F道跡(寺院)	平安
34	立明寺古墳	古墳
35	立明寺家跡	古墳・飛鳥
36	陸明寺跡(推定地)	平安・中世
37	龍川家跡	中世
38	宮の奥1〜3号経塚	平安・鎌倉
39	通風寺跡(推定地)	平安・中世
40	仏生寺跡(推定地)・塚	中世
41	ブシヨウツヤヤ古墳群	古墳
42	中海道跡	縄文
43	中海B道跡(長寛寺推定地)	古墳・中世
44	中海C道跡	平安・中世
45	赤穂谷口道跡	縄文
46	岩瀬道跡	縄文・中世
47	赤穂谷横穴群	中世
48	岩瀬寺跡(推定地)	平安
49	小山城跡	中世
50	岩瀬城跡	中世
51	仙々城跡	中世
52	松谷道跡(寺院・塚)	奈良・中世
53	護国寺跡	平安
54	権の木山道跡	縄文
55	島根寺跡(推定地)	平安
56	浄水寺跡	古墳・中世
57	八幡道跡	縄文・古墳
58	八幡古墳群	古墳・飛鳥
59	八幡寺跡(再興九谷)	近世末期
60	亀山玉造道跡	古墳
61	輕海庵寺・中世墓群	平安・中世
62	西芳寺道跡	平安・中世
63	輕海西芳寺道跡	縄・古・中世
64	荒木田道跡	古墳・中世
65	佐々木アサバク道跡	弥生・中世
66	佐々木ノナク道跡	弥生・中世
67	佐々木道跡	平安
68	浄明道跡	弥生・中世
69	打越道跡	弥生・中世
70	若村古家跡(再興九谷)	近世末期
71	吉竹道跡	弥生・中世

№	道跡名・種別等	時代
72	種生1号墳・兼谷古墳	古墳
73	千手道跡	縄文・古墳
74	千手古墳群	古墳
75	蓮代寺跡	中世
76	蓮代寺A道跡(製鉄跡)	古代
77	八日市地方道跡	弥生
78	園町道跡	弥生・中世
79	藤村藤城道跡	弥生
80	謝野道跡・鎌倉道跡	弥・古・中世
81	松谷道跡	弥生・中世
82	長瀬道跡	弥生・中世
83	中ノ江道跡	弥生・古代
84	高堂道跡	弥生・中世
85	長田道跡	弥生・古墳
86	平高橋川道跡	弥生
87	白江橋川道跡・白江道跡	弥生・中世
88	一針道跡	縄文
89	一針C道跡	弥・古・中世
90	一針B道跡(弥生説治)	弥生・古墳
91	千・龍馬道跡	古墳・中世
92	千・オキダキ道跡(集落・古墳)	古墳・中世
93	大野道跡	弥生・中世
94	大野B道跡	不詳
95	千代デジロA道跡	弥・古・中世
96	千代デジロB道跡	弥・古・平安
97	千代デジロC道跡	古墳・平安
98	牛島宮の島道跡	古代
99	牛島ツル道跡	縄文・中世
100	佐野A道跡	弥生・古代
101	佐野B道跡	古代
102	佐野道跡	弥生・古代
103	蓮谷道跡	古墳・飛鳥
104	石手平アサバダ道跡	弥生・中世
105	高堂西方堂(ヨモト)道跡	弥生
106	中ノ江道跡	弥・古・古代
107	西任田道跡	古代・中世
108	吉光道跡	弥生・中世
109	和山山下道跡	縄文・中世
110	寺井山古墳群	古墳
111	和山古墳群	古墳
112	東寺山古墳群	古墳
113	秋葉山古墳群	古墳
114	西山古墳群	古墳
115	秋葉道跡	古代
116	高堂道跡	縄・古・中世
117	徳久山郷道跡	不詳
118	徳久・荒塚道跡	縄・中世
119	下関道跡	古・古代
120	荒塚古墳群A支群	古墳
121	荒塚古墳群B支群	古墳
122	下関発光白山古墳群	古墳
123	下関発光モンミヤ道跡	古代・中世
124	下関発光道跡	古墳
125	下関発光道跡	古墳
126	下関発光道跡	古墳
127	下関発光道跡	古墳
128	下関発光道跡	古墳
129	下関発光道跡	古墳
130	下関発光道跡	古墳
131	下関発光道跡	古墳
132	下関発光道跡	古墳
133	下関発光道跡	古墳
134	下関発光道跡	古墳
135	下関発光道跡	古墳
136	下関発光道跡	古墳
137	下関発光道跡	古墳
138	下関発光道跡	古墳
139	下関発光道跡	古墳
140	下関発光道跡	古墳
141	下関発光道跡	古墳
142	下関発光道跡	古墳
143	下関発光道跡	古墳
144	下関発光道跡	古墳
145	下関発光道跡	古墳
146	下関発光道跡	古墳
147	下関発光道跡	古墳
148	下関発光道跡	古墳
149	下関発光道跡	古墳
150	下関発光道跡	古墳
151	下関発光道跡	古墳
152	下関発光道跡	古墳
153	下関発光道跡	古墳
154	下関発光道跡	古墳
155	下関発光道跡	古墳
156	下関発光道跡	古墳
157	下関発光道跡	古墳
158	下関発光道跡	古墳
159	下関発光道跡	古墳
160	下関発光道跡	古墳
161	下関発光道跡	古墳
162	下関発光道跡	古墳
163	下関発光道跡	古墳
164	下関発光道跡	古墳
165	下関発光道跡	古墳
166	下関発光道跡	古墳
167	下関発光道跡	古墳
168	下関発光道跡	古墳
169	下関発光道跡	古墳
170	下関発光道跡	古墳
171	下関発光道跡	古墳
172	下関発光道跡	古墳
173	下関発光道跡	古墳
174	下関発光道跡	古墳
175	下関発光道跡	古墳
176	下関発光道跡	古墳
177	下関発光道跡	古墳
178	下関発光道跡	古墳
179	下関発光道跡	古墳
180	下関発光道跡	古墳
181	下関発光道跡	古墳
182	下関発光道跡	古墳
183	下関発光道跡	古墳
184	下関発光道跡	古墳
185	下関発光道跡	古墳
186	下関発光道跡	古墳
187	下関発光道跡	古墳
188	下関発光道跡	古墳
189	下関発光道跡	古墳
190	下関発光道跡	古墳
191	下関発光道跡	古墳
192	下関発光道跡	古墳
193	下関発光道跡	古墳
194	下関発光道跡	古墳
195	下関発光道跡	古墳
196	下関発光道跡	古墳
197	下関発光道跡	古墳
198	下関発光道跡	古墳
199	下関発光道跡	古墳
200	下関発光道跡	古墳
201	下関発光道跡	古墳
202	下関発光道跡	古墳
203	下関発光道跡	古墳
204	下関発光道跡	古墳
205	下関発光道跡	古墳
206	下関発光道跡	古墳
207	下関発光道跡	古墳
208	下関発光道跡	古墳
209	下関発光道跡	古墳
210	下関発光道跡	古墳
211	下関発光道跡	古墳
212	下関発光道跡	古墳
213	下関発光道跡	古墳
214	下関発光道跡	古墳
215	下関発光道跡	古墳
216	下関発光道跡	古墳
217	下関発光道跡	古墳
218	下関発光道跡	古墳
219	下関発光道跡	古墳
220	下関発光道跡	古墳
221	下関発光道跡	古墳
222	下関発光道跡	古墳
223	下関発光道跡	古墳
224	下関発光道跡	古墳
225	下関発光道跡	古墳
226	下関発光道跡	古墳
227	下関発光道跡	古墳
228	下関発光道跡	古墳
229	下関発光道跡	古墳
230	下関発光道跡	古墳
231	下関発光道跡	古墳
232	下関発光道跡	古墳
233	下関発光道跡	古墳
234	下関発光道跡	古墳
235	下関発光道跡	古墳
236	下関発光道跡	古墳
237	下関発光道跡	古墳
238	下関発光道跡	古墳
239	下関発光道跡	古墳
240	下関発光道跡	古墳
241	下関発光道跡	古墳
242	下関発光道跡	古墳
243	下関発光道跡	古墳
244	下関発光道跡	古墳
245	下関発光道跡	古墳
246	下関発光道跡	古墳
247	下関発光道跡	古墳
248	下関発光道跡	古墳
249	下関発光道跡	古墳
250	下関発光道跡	古墳
251	下関発光道跡	古墳
252	下関発光道跡	古墳
253	下関発光道跡	古墳
254	下関発光道跡	古墳
255	下関発光道跡	古墳
256	下関発光道跡	古墳
257	下関発光道跡	古墳
258	下関発光道跡	古墳
259	下関発光道跡	古墳
260	下関発光道跡	古墳
261	下関発光道跡	古墳
262	下関発光道跡	古墳
263	下関発光道跡	古墳
264	下関発光道跡	古墳
265	下関発光道跡	古墳
266	下関発光道跡	古墳
267	下関発光道跡	古墳
268	下関発光道跡	古墳
269	下関発光道跡	古墳
270	下関発光道跡	古墳
271	下関発光道跡	古墳
272	下関発光道跡	古墳
273	下関発光道跡	古墳
274	下関発光道跡	古墳
275	下関発光道跡	古墳
276	下関発光道跡	古墳
277	下関発光道跡	古墳
278	下関発光道跡	古墳
279	下関発光道跡	古墳
280	下関発光道跡	古墳
281	下関発光道跡	古墳
282	下関発光道跡	古墳
283	下関発光道跡	古墳
284	下関発光道跡	古墳
285	下関発光道跡	古墳
286	下関発光道跡	古墳
287	下関発光道跡	古墳
288	下関発光道跡	古墳
289	下関発光道跡	古墳
290	下関発光道跡	古墳
291	下関発光道跡	古墳
292	下関発光道跡	古墳
293	下関発光道跡	古墳
294	下関発光道跡	古墳
295	下関発光道跡	古墳
296	下関発光道跡	古墳
297	下関発光道跡	古墳
298	下関発光道跡	古墳
299	下関発光道跡	古墳
300	下関発光道跡	古墳
301	下関発光道跡	古墳
302	下関発光道跡	古墳
303	下関発光道跡	古墳
304	下関発光道跡	古墳
305	下関発光道跡	古墳
306	下関発光道跡	古墳
307	下関発光道跡	古墳
308	下関発光道跡	古墳
309	下関発光道跡	古墳
310	下関発光道跡	古墳
311	下関発光道跡	古墳
312	下関発光道跡	古墳
313	下関発光道跡	古墳
314	下関発光道跡	古墳
315	下関発光道跡	古墳
316	下関発光道跡	古墳
317	下関発光道跡	古墳
318	下関発光道跡	古墳
319	下関発光道跡	古墳
320	下関発光道跡	古墳
321	下関発光道跡	古墳
322	下関発光道跡	古墳
323	下関発光道跡	古墳
324	下関発光道跡	古墳
325	下関発光道跡	古墳
326	下関発光道跡	古墳
327	下関発光道跡	古墳
328	下関発光道跡	古墳
329	下関発光道跡	古墳
330	下関発光道跡	古墳
331	下関発光道跡	古墳
332	下関発光道跡	古墳
333	下関発光道跡	古墳
334	下関発光道跡	古墳
335	下関発光道跡	古墳
336	下関発光道跡	古墳
337	下関発光道跡	古墳
338	下関発光道跡	古墳
339	下関発光道跡	古墳
340	下関発光道跡	古墳
341	下関発光道跡	古墳
342	下関発光道跡	古墳
343	下関発光道跡	古墳
344	下関発光道跡	古墳
345	下関発光道跡	古墳
346	下関発光道跡	古墳
347	下関発光道跡	古墳
348	下関発光道跡	古墳
349	下関発光道跡	古墳
350	下関発光道跡	古墳
351	下関発光道跡	古墳
352	下関発光道跡	古墳
353	下関発光道跡	古墳
354	下関発光道跡	古墳
355	下関発光道跡	古墳
356	下関発光道跡	古墳
357	下関発光道跡	古墳
358	下関発光道跡	古墳
359	下関発光道跡	古墳
360	下関発光道跡	古墳
361	下関発光道跡	古墳
362	下関発光道跡	古墳
363	下関発光道跡	古墳
364	下関発光道跡	古墳
365	下関発光道跡	古墳
366	下関発光道跡	古墳
367	下関発光道跡	古墳
368	下関発光道跡	古墳
369	下関発光道跡	古墳
370	下関発光道跡	古墳
371	下関発光道跡	古墳
372	下関発光道跡	古墳
373	下関発光道跡	古墳
374	下関発光道跡	古墳
375	下関発光道跡	古墳
376	下関発光道跡	古墳
377	下関発光道跡	古墳
378	下関発光道跡	古墳
379	下関発光道跡	古墳
380	下関発光道跡	古墳
381	下関発光道跡	古墳
382	下関発光道跡	古墳
383	下関発光道跡	古墳
384	下関発光道跡	古墳
385	下関発光道跡	古墳
386	下関発光道跡	古墳
387	下関発光道跡	古墳
388	下関発光道跡	古墳
389	下関発光道跡	古墳
390	下関発光道跡	古墳
391</		



第5図 河田山古墳群周辺の遺跡

飛鳥・奈良・平安時代

河田山古墳群の横穴式石室が構築された飛鳥時代の集落動向は判然としていない。低地部ではかなり広範囲で遺物を検出しているものの、月津台地のような遺構の濃密な展開は見られない。しかし、丘陵部では窯業生産が活発で、野々市市末松庵寺に瓦を供給した湯屋古窯跡や、近年では立明寺窯でも瓦併焼窯が発見されるなど、河田山の石室に近い時期の瓦窯が目される。8世紀代からは、和気後山古窯跡群や国府台造成地内の河田山1号窯跡、上八里1号窯跡など窯跡は比較的広域に分布する。能美窯跡群は、江沼窯跡群よりは若干遅れる6世紀後半にはじまり、9世紀代後半ではほぼ終焉する。

奈良時代以降、能美低地の集落遺跡は増加傾向となり、佐々木遺跡では溝と櫓で区画された中に整然と配置された建物群が検出されている。8世紀前半の「野身郷」や9世紀前半の「財部寺」と記された墨書土器が発見されており、公的施設ないしは豪族居館の可能性もある。また、同じく9世紀前半の墨書土器で、能美市徳久・荒屋遺跡から「専常綱長江沼臣」と解せるものが出土している。江沼、財部ともに越前国正税帳で郡司として名を連ねる氏族である。千代オオキダ遺跡や水場祭祀遺構をもつ荒木田遺跡でも8世紀代の建物群が検出され、9世紀前半に一旦集落展開が低調となるものの、後半からは再び増加傾向となる。高堂遺跡では護国經典名を記した木簡が出土し、仏教施設に関連するような遺構も検出されている。漆町遺跡群や佐々木遺跡群でも堅調である。

弘仁14(823)年に越前国から分離して加賀国が誕生した。これまで越前国江沼郡であった南加賀は、能美郡と江沼郡に分郡される。梯川流域は能美郡となり、加賀国府が置かれた地とされている。その加賀国府推定地が河田山の前面に横たわる古府台地で、承和8(841)年に既存の勝興寺を転用した加賀国分寺はこの台地の十九堂山遺跡と考えられている。残念ながら台地全体は耕地整理が行われており、南野台遺跡や小野遺跡では未だ有力な遺構は確認されていない状況である。一方、周辺の丘陵部では、8世紀後半から10世紀代にかけて、松谷庵寺や八里向山B遺跡、里川E遺跡、浄水寺跡など、多数の山間寺院が成立しており、国分寺の前身となる寺院から国分寺へとつながる仏教活動が継起したことを補強する。また、寛治5(1091)年、加賀国司の藤原為房が下向したときの記録『為房卿記』では、白山や国分寺とともに加賀国総社の「府南社」が祈禱などで盛んに登場する。現在も「フナヤマ」の地名を残す南野台遺跡内の石部神社がその遺称地とされている。

中世・近世

平安時代末期には、鶴川涌泉寺と国府を舞台に、源平争乱の引き金となった安元事件が勃発している。涌泉寺は、国衙を取り巻くように配置されていた白山中宮八院の一つである。中宮八院はいずれも推定地の域をでないが、白山寺社勢力の台頭が国衙と対抗しうるまでに成長していたことがうかがえる。その後、鎌倉、室町時代にかけての文献資料では、数多くの荘園記録とともに、在地領主層の白江介や埴田介、弥里介、八幡介、板津介などが登場する。いずれも在庁官人の「介」を名乗っており、国衙とのつながりを主張していた様子が読み取れる。こうした中世の領主層や荘園と関わりが深い遺跡も能美低地には数多く展開する。長田南遺跡(板津)や領主居館と思われる白江梯川遺跡、佐々木アサバタケ遺跡(能美荘)、八里向山H遺跡・F遺跡の中世墳墓群(弥里介)などである。また、本造成区域内で発見された上八里中世横穴のような中世横穴や地下式坑が多数展開するのも本地域の特徴である。戦国期の一向一揆の時期には、虚空蔵山のような山城が展開する。特に、白山麓へとつながる峠越えの谷沿いに、鶴川堡跡や岩淵城などの山城や砦が数多く展開している。

寛永16(1639)年、前田利常は小松城を隠居の地と定め、大規模な修築を行い、多数の石切場が開発された。江戸時代後期には、花坂で良質な陶石が発見され、若杉窯や八幡窯が藩窯として隆盛する。再興九谷と呼んでいるが、明治期にジャバンクタニとして一世を風靡することになる。

第3節 調査に至る経緯と調査経過

1. 住宅団地にかかる河田山古墳群（河田山遺跡群）の調査

東部産業振興団地の造成計画の策定から河田山古墳群の緊急発掘と保存問題に至るまでの顛末については、本報告のⅠにおいて詳述したので、ここでは主に調査経過に関する概略にとどめておきたい。

昭和57年（1982）11月、小松市（担当課は当時の開発振興課）は、加賀産業開発道路に面した約84.8ヘクタールを造成し、住宅地と工業地とを兼ね備えた職住近接の団地として整備する「小松市東部地区産業振興団地造成事業基本設計（概要説明書）」を公開した。造成スケジュールは、住宅部分が三つの工区、工業団地が二つの工区の都合五つの工区に分かれ、昭和66年度までの9カ年で順次完成というものであった。ところが、昭和61年の年明け1月7日になって、突然、住宅部分の3つの工区が統合され、誘致企業のオーダーメード方式となる第2工区を除いて、河田山古墳群を含むかつての第1～第3工区を併せて第1期工事として47.87haを昭和61年度に一举に造成する計画が打ち出された。基本設計の公開以降、造成地内の分布調査がほとんど行われないまま住宅団地部分の本工事に突入したことになる。さらに、工事着手と同時に住宅地はカタログ販売されたため、2年後の昭和63年7月には住宅が建ちはじめるというスケジュールである。

住宅団地の造成計画策定段階で周知されていた古墳は7基であり、そのうち1基（3号墳）のみが調査対象となっていたことから、開発側からすると保存優先との姿勢を示したことになる。最終的には65基を数える古墳群となり、10基が保存対象、55基の古墳が約1年の期間で発掘調査を終えたことになる。この河田山古墳群の調査成果については、既に報告書Ⅰとして刊行済みである。

古墳の分布範囲には、僅かながら縄文時代の石器や土器の散布がみられ、また、保存対象となった1号墳の存在する尾根では、弥生時代後期の集落が存在し、奈良時代の火葬墓2基と旧石器時代遺物の散布もみられた。河田山古墳群最大となる前方後円墳の墳丘上には奈良時代の須恵器窯跡も発見されている（河田山1号窯）。これら古墳以外の遺構と遺物について、本報告で取りあげた。



第6図 東部産業振興団地造成計画と工事着手前の周知遺跡

2. 工業団地にかかる上八里遺跡群の調査

昭和62年9月19日付けで、ようやく小松市東部産業振興団地造成に伴う第1期工事（住宅団地）区域、すなわち河田山古墳群の発掘調査完了報告が提出された。開発振興課からは、古墳群の調査も終盤にさしかかった同年7月7日付けで、工業団地となる第2期工区35.93haの調査依頼が既に提出されていた。第1期工区で分布調査と工事が並行した反省から、今回は詳細分布調査が先行され、10月22日から翌昭和63年4月28日まで試掘調査を実施している。

周知遺跡としては、第6図に示した穴場横穴古墳や上八里横穴古墳群、上八里1号・2号窯跡が存在したが、いずれも位置は不明確であった。分布調査の結果、穴場横穴古墳は存在せず、ことなる尾根で上八里横穴墓とした2基を発見した。同一のものの位置違いかは不明である。また、上八里窯跡の2号窯はすでに消滅とされていたため、確認された須恵器窯跡1基を上八里1号窯とした。上八里横穴古墳群は、11基からなる中世横穴と判明したため上八里中世横穴群とした。新たに確認したのは土器散布地1カ所（F地点）のみで、上八里遺跡群は、これらを総称したものである。河田山と上八里にはさまれた下八里地籍内の丘陵地では、遺跡は確認されなかった。

発掘調査は、試掘調査が終了してから間もない昭和63年5月9日から開始され、発見された遺跡全てがほぼ同時並行で調査が行われている。確認された遺跡が少なかったことや、住宅団地の調査で調査員が増強されたこともあり、同年の8月31日には発掘調査が完了している。工事着手までには比較的余裕があったことから、市の開発部局としてもさほど緊迫感はなく、逆に航空測量などの投入がなされないことで、座標などの記録保存に不十分となる部分があったことは否めない。

ともかくこの工業団地にかかる調査によって小松市東部産業振興団地造成に伴うすべての調査が完了した。造成工事が完了し、グリーンタウン国府台として工業団地も含めて竣工の式典が行われたのは、平成2年（1990）10月27日である。



第7図 東部産業振興団地造成地内の旧町界と判明した遺跡

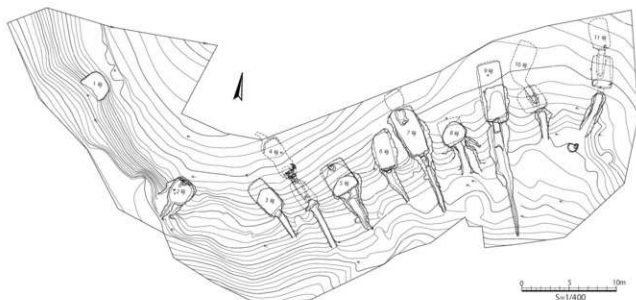
3. 出土品整理と報告書作成

発掘調査終了後の出土品整理の状況については、報告書Ⅰでも既に触れているが、保存問題を経て約束となっていた河田山古墳群史跡資料館開館に向けた展示品の整理が優先されていた。平成4年7月1日、河田山古墳群史跡資料館が開館したが、その後、開発が急激に増えていたことなどが相まって、出土品整理作業は立ち消えとなった。それから長い年月を経た平成22年4月25日、待望の小松市埋蔵文化財センターが開館する。河田山古墳群史跡資料館は、埋蔵文化財センターの管理施設となり、平成24年からは「まいぶん魅力アップ推進費」として少しずつ図面整理が進められ、平成27年度からは、加賀国府誕生の前史を彩る重要な古墳群に位置づけ、「加賀国府歴史再発見費」として発掘調査報告書刊行に向けた整理作業を始めた。そして、令和2年ようやく『小松市東部産業振興団地造成事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ』として、最も懸案であった河田山古墳群の報告が刊行された。引き続き住宅団地造成区域、つまり河田山古墳群と重なる部分で検出された古墳以外の遺構と出土品整理が継続され、また、工業団地区域の上八里遺跡群の出土品整理も進められた。ただし、今回、報告に含めることができなかった上八里中世横穴群のことについて、次に記しておきたい。

上八里中世横穴群について

上八里中世横穴は、周知の遺跡として横穴古墳として認識されていたものが、この発掘調査により、明確に中世横穴であることが確認されたものである。調査では、11基の横穴が発見され、内、3基が複室構造であった。出土遺物は、瀬戸美濃の茶入や硯、中国製の青花や白磁、茶臼や天目茶碗など、茶道具を中心とした概ね16世紀前半頃の資料群である。

遺構や出土遺物の概要については、調査担当者の宮下幸夫が、平成19年(2007)に『小松市立博物館研究紀要』第43号において「南加賀における地下式坑と中世横穴」と題した論考の中で既に出土遺物の実測図も交えて要点を報告していた。今回は、遺構や遺物の再トレースなどによる肉付けの予定であったが、収蔵庫の遺物を再点検したところ、未接合の越前焼大甕や、未鑑定で腐蝕の進んだ多くの鉄製品が含まれていることが判明した。鉄製品の中には鎧の小札(兜の鏝?)などが含まれており、限られた期間でにはわかりたいことが判明し、非常に申し訳ないこととなるが、今回の報告から除外せざるを得ないことになった。別の機会に報告となることをご容赦願いたい。



第8図 上八里中世横穴全体図

参考文献（第1章）

- 石川県教育委員会 1971『能美・小松丘陵パイロット事業区域埋蔵文化財分布調査報告』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1982『石川県立埋蔵文化財センター年報』第1号 昭和54年度
- 石川県立埋蔵文化財センター 1984『県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』（昭和54・55年度）
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986『漆町遺跡Ⅰ』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988『辰口西部遺跡群Ⅰ（下関発遺跡、徳久・荒屋遺跡）』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988『白江梯川遺跡Ⅰ』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1989『白江梯川遺跡Ⅱ』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1990『高堂遺跡』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1995『荒木田遺跡』
- （社）石川県埋蔵文化財保存協会 1998『八幡遺跡Ⅰ』
- （財）石川県埋蔵文化財センター 2001『小松市ブッシュウジヤマ古墳群』
- （財）石川県埋蔵文化財センター 2003『白江梯川遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第10号
- 石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002『小松市一針B・一針C遺跡』
- 石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2008『浄水寺跡』
- 石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2012『千代・能美遺跡』
- 石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2013『八幡遺跡Ⅱ』
- （公財）石川県埋蔵文化財センター 2017『松梨遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第37号
- （公財）石川県埋蔵文化財センター 2017『西任田遺跡、中ノ庄遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第37号
- （公財）石川県埋蔵文化財センター 2017『中ノ江遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第37号
- （公財）石川県埋蔵文化財センター 2018『松梨遺跡』『石川県埋蔵文化財情報』第39号
- 金沢大学考古学研究会 1986『金沢大学考古学研究会活動報告 第4号—能美地域の古墳群と梯川流域—』
- 小松市 2020『新修小松市史 資料編 17 考古』
- 小松市 2002『新修小松市史 資料編 4 国府と荘園』
- 小松市教育委員会 1989『後山無常堂古墳・後山明神3号墳発掘調査報告書』
- 小松市教育委員会 1994『松梨遺跡』
- 小松市教育委員会 1996『千木野遺跡』
- 小松市教育委員会 1996『荒木田遺跡』
- 小松市教育委員会 1998『長田南遺跡』
- 小松市教育委員会 2001『古竹遺跡』
- 小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』
- 小松市教育委員会 2004『八里向山遺跡群』
- 小松市教育委員会 2004『佐々木遺跡』
- 小松市教育委員会 2006『千代・能美遺跡』
- 小松市教育委員会 2006『千代オオキタ遺跡』
- 小松市教育委員会 2008『埴田後山明神4号墳』『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- 小松市教育委員会 2010『陸明寺跡確認調査』『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
- 小松市教育委員会 2010『松谷庵寺跡確認調査』『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
- 小松市教育委員会 2013『八幡遺跡』『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅸ』
- 小松市教育委員会 2018『松谷庵寺跡』『小松市内遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ』
- 小松市経済観光部文化創造課 2015『加賀国府を訪ねる』パンフレット
- 小松市立博物館 2009『若杉遺跡』
- 辰口町教育委員会 1985『辰口町湯屋古窯跡』
- 辰口町教育委員会 2004『下関発茶臼山古墳Ⅱ—第3次発掘調査報告書—』
- 辰口町教育委員会 2005『和気後山古窯跡群』
- 寺井町・寺井町教育委員会 1997『加賀 能美古墳群』
- 宮下幸夫 2007『南加賀に於ける地下式坑と中世横穴』『小松市立博物館紀要』第43号